

水辺を見直す

水辺が注目され、水辺をとりまく環境が
変わり始めている。

しかしそれは、

やや流行りに流されている感がある。

これからは、より地域に根づいた
そして子供たちにも魅力のある、
個性的な水辺を創造したい。

●水辺の魅力

高橋 水辺というのは、川であろう
が、湖であろうか、あるいは、沼でも、
海岸でも、要するに自然の一部だから、
僕は自然の魅力が横溢している水辺が
魅力があると思いますね。ところが、
最近はどうも人工的すぎると思うんで
す。都会はもとより、農村さえも、非
常に人工的な水辺が多いですね。農山
村だったら本当の緑を残した水辺の設
計をしてほしいと思います。

最近、水辺空間が見直されて、きれ
いにしようという動きは結構なだけ
れども、どうも少し流行に堕して、自
然を忘れているんじゃないかというの
が残念なんです。

森 僕は、大きな川じゃなくて、小
さな町中の川で、なおかつ自然らしさ
を感じさせるみたいな川が好きです。
ある人が、水辺の魅力とは目のやり
場だと言っています。都市のなかで、
ふっと、十分なり三十分なり、じっと

高橋 裕 芝浦工業大学土木工学科教授
森 清和 よこはま かわを考える会
田村 明 法政大学教授・本誌編集委員
岡島 成行 読売新聞記者・本誌編集委員



田村 明 さん

たらずんでも変に思われないとい
ろ。道端でそんなことをしていれば、
みんなに気遣いかと思われちゃうんで
すけれども、水辺ならそんなことはな
い。そんなところが魅力なんじゃない
かなと思っています。何となく理屈抜
きていいなという感じはあるんですよ
ね。

田村 僕の体験的な話でいくつかい
うと、僕は東京育ちで、杉並に三年ぐ
らいいたんです。善福寺川のすぐ近く
で、そのころは水がとうとうと流れて

水草が生えて、その水草にヒルがいっ
ぱいついていて、おっこちると血を吸
われちゃうというのが、ちよつと怖く
てね。まったく田舎の川といった趣で、
まわりは畑でした。そこではじめて僕
は水辺というのに触れたような感じが
するんです。

それから旧制高等学校の時代に静岡
へ行きました。浅間さんという神社が
あって、その前を流れる水がものすこ
く澄んでいた。街のなかのちよつちやな
溝ですが、そのときはものすごく魅力
があった。あんな静謐な水が市街地の
なかを流れているのに大変感心した。
さっきの杉並は、東京といっても完全
に田園でしたからね。

私はその後、大阪の淀屋橋のすぐ近
くの会社に勤めました。昼休みになら
んと中之島へ行つて、そこでぼやつと水
を見ていると何となくいい気持ちで、
ずいぶん行きました。

でも、それよりも、僕の人生にとつ
て水辺が決定的な意味を持ったのは、
大阪から東京に来て、職業を変えたと
きです。

どこに住むかとなったときに、横浜
を紹介された。横浜というのは、戦後
のイメージは良くなかったんですよ。
でも、行ってみるとこれが山下公園の
すぐ近くで、公園へ出てみると、まさ
にこれは水辺なのね。海の方ですけれ
ども。大きな客船が入っていました。
これはいいと、横浜に決めちゃったわ
けですよ。それでその後、僕は横浜市
役所に入っちゃった。この水辺がなかつ

たら、僕は余所へ行っちゃった。(笑)

岡島 広さの魅力みたいなものがあるんじゃないでしょうか。海はもちろんだし、川でも、中くらの川だとやっぱり対岸まで距離があるし。隅田川みたいなところでも、それなりの幅があれば、川辺に立つと何となくスーッとした気がして。

僕は、山登りが好きで、登山ばかりやっていますけれども、三十ぐらいまでのころは、嫌なことがあったりする、横浜港の大栈橋に行つて気を落ちつけていた。あそこでビールを飲んだり、たばこでも吹かして、小一時間いけると、ケンカしたのも忘れて帰っている。あまりちっちゃいことを気にするなという感じになれるような広さがある。

●トータルに水辺を考える

高橋 水辺空間を良くしようという動きが出てきたのは、水辺がダメになつたからでしょうね。昔は、わざわざ口に出さなくても、いたるところにいい水辺があつたわけです。ところが、どこもかしこもそれがダメになつて、昔の水辺にもどそうということだと思ふんです。あまりにも荒れ果ててしまつた。

田村 水に面する方を表と考えるのか裏と考えるのか。そこが変わつてしまつたんじゃないですかね。今は裏口になつちやつた。

典型的なのは、よく話に出てくる九州の柳川の例で、掘割の水は今までは生活そのものであつて、生活用水でも

ある。

田村 水辺の魅力というのは多様性だと思ふんですよ。僕は、自分が書いた『都市の個性とは何か』のなかに水辺の問題を取り上げて、今の広がりしたことや物を映すこととか、海の場合には、向こうの方に何かあるという未知なるものに対するイメージが出てくるとか、そういう魅力があると書いた。そして、さっき話した浅間さんのように、全然広がりが無い川にも魅力がある。それは、水が非常に澄んでいることです。

水というのは、動きとか、清潔度とか、そういう感じも人に与えるから、僕は水の魅力は非常に多様じゃないかと思ふんです。

あり、自分たちの遊び場でもあつた。つまり、表だった。それが、近代的な水道が普及することによって裏になつてしまつて、水が顧みられなくなつた。

高橋 柳川は一つの典型ですけれども、ある意味では日本中似た傾向で、一時的に水が顧みられなくなつたわけ



岡島 成行 さん

です。例えば農村の農業用水路。農業用水路というのは、農業用水だけに使うのではなくて、農家の人たちは顔を洗い、洗濯をし、そして飲み水にし、あるいは消防用水に使い、今の言葉でいえば多目的だったわけです。

ところが、明治以降、とくに第二次大戦以後、学問も行政も、ともかく専門分化するのが進歩であるかのようになって、農業用水路も農業用水を能率良く送れば良いということになってしまった。農村にまで水道が普及して、まず飲み水とか、家庭用水としての農業用水の使命がなくなつたこともあるんです。

そうなるも農業用水路は文字どおり農業用水のためだけのものになる。それにはコンクリートで固め、直線水路にして、大量に速く送る方が効率がいい。それで子供が落ちて死んだり、ケガをすると訴えられる。そこで、今度は人が近づけないようにフェンスを置く。かつての、農民と川とのつき合いがなくなつてきてしまふんですね。

これまでは、直接の経済効果だけを計りすぎたわけですよ。しかし、それ以外の効果が重要である。

岡島 計量されないものというのは、壊れてみたり、失つてみてわかるんですよ。親みたいなもの。

田村 困つたことに、そうしたことに専門家は絶対気がつかないんですよ。非常に細分化されているから、その目から見るとそれなりの合理性を持っているわけ。専門化した人がいることは



▲柳川の掘割

必要だとは思ふんですよ。でも、あまりそれが強すぎることに問題があつて、もっとトータルに、普通の人間の考え方で問題を考えないといけない。市民的感觉で見ると、問題点は意外に早く出てくるはずなんです。

森 専門家といつても、さほど専門でないような感じがするんです。(笑) 制度とか技術とか、いろいろあるんだけれども、実際の現場で、じゃ、こつやったら、というときには、あまり専門的な発想じゃないんじゃないかという感じがするんですよ。

専門家て一生懸命やっている人でも、こういう川はこういう方がいいから、今これしかできないと頑張るんです。結構なんです。でも、どうも治水と環境との調和とかになると、疑問に思うことも多い。

田村 専門家でないという感じが一

●市民運動と、変化する河川行政

番するところはという点ですか。
森 水際の処理の場合でいうと、人によって、治水上、絶対矢板で処理しないとダメだと言う人もいれば、いや、それはそんなのでなくてもいいと言う人もいます。法面の上だって、ブロックじゃなくて、土羽でいいよと言う人もいれば、そうじゃないと言う人もいます。

同じ専門家でも人によって意見が全然違うんですよ。
田村 つけ込む余地があつていいんじゃないですか。全員、同じことしか言わなかったら困るけれども。(笑)
高橋 全員一致で、これは霞ヶ関の指令ですと言われると、これはもう食いつく余地がないでしょう。



森 清和さん

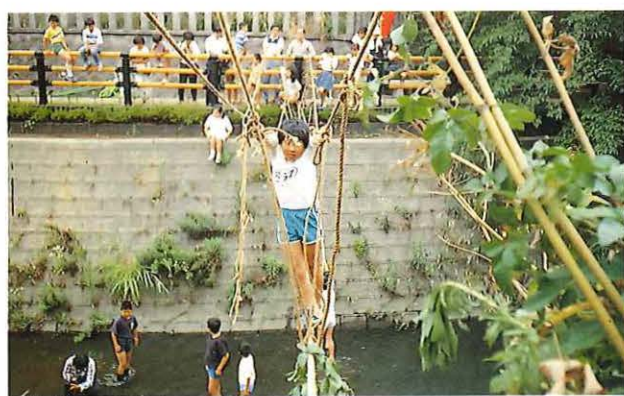
高橋 例えば昭和四〇年代前半ぐらい、一九六〇年代ごろまでは、今のようない水辺空間なんていることはほとんどだれも言われなかったんですよ。
 そのころまでは、川的美観とか、親水に当たる工事は「お遊び」と称して、非常に軽蔑されたわけです。そんな金があるなら、もっと頑丈な堤防を、十センチでも高い堤防を築く。あるいは水資源をもっと有効に活用できるような川の設計をすべきである……。

岡島 「お遊び」という言葉は端的に表していますね。
田村 いや、お遊びはまだいいんだ。僕ら部外者が同じことを言った場合には「ふざけている」と……。

高橋 ところが、その伝でいくと、最近はお遊びだらけ。昭和四〇年ごろには、川べりに降りて行けるように堤防に階段をつけることなどは、絶対に許されなかったですよ。市民が近づきやすいためなんて、そんなふざけたことを言っちゃいかんと……。 (笑)
 ところが、オイルショックもさまざまな効果があつたと、僕は思っている

んです。経済的に大変だったかもしれませんが、いろいろな反省を与えたと思う。高度成長のままでずうっと突っ走っていたら、環境問題などは相当大変なことになったでしょうね。
 一方で、住民の声も含めて環境やアメニティ問題がかまびすしくなってきた。住民に親しまれる川でなければ河川行政もやっていけなくなってきたですね。
岡島 田村先生が、横浜市で仕事をされていたころはいかがでしたか。
田村 横浜市は、昭和四十三年に河川部をつくつたんですよ。大体河川は国の管理でしょう。当時は、指定都市で河川を扱う部はどこにもなかった。

せいぜいあつても課なんですよね。都市のなかにある川は重要です。川は小さくても、一遍事があれば実際の被害量は非常に大きいです。だから、いろんな意味で見直しを始めた。ただ、質の方の問題は十分だったとは思っていません。例えば遊水池みたいなものでも、はじめは反対されましたからね。遊水池をつくるのにまず反対で、それをクリアしたら今度は絶対水をあけておけと言ってますよ。
 それを相当頑張つて、とにかく常時水を入れておく池をつくつた。もちろんそれでも遊水池機能を果たすわけじゃないなんて、そんな馬鹿な話はない。そこへ水辺住宅をこしらえた。すぐ近くに水辺のある住宅はいいものです。そんなに危険もない。そういう水辺の公的住宅をつくつたことも、横浜で最初にやったことですね。
岡島 市民レベルから見るといかがでしょう。
森 一〇年ぐらい前は、河川管理を担当されてる方から、何を言うんだ、とんでもない、それこそお遊びどころか、遅れていると言われましたね。確かにそのころは都市水害がひどかったときでもあつたんですけども、遅れていると言われながらもつづけていると、この四、五年はずいぶん変わってきて、そういう遊びでやっているのを少し仕事でもやらせてもらえるようになってきました。(笑)
 行政側も、文句を言うんだつたら、



▲大岡川でのイベント

どうい川がいいのか案を出してみろと、ずいぶん変わってきたなと思いますね。
岡島 森さんたちのすすめている大岡川での活動を見てみると、汚い川でよくあんなことをやるなあと、最初は思っただけでも……。
森 汚いからおもしろいというのもあるんですけど。確かにきれいな川の方がいいし、川の魅力もあるけれども、川を通しての人の出会いとか、汚い川がきれいになっていくプロセスがいります。四、五年頑張つてやっていると、川も相当きれいになっていく。今は魚もすむし、水草も出てきた。
 最初のころは、川掃除したら、自分の身体についたにおいが一日とれない感じだったけれども、今は川で遊べる

ようになってきている。

岡島 そうしたなかで、水辺の市民管理という話はまだないですか。

森 まだないですね。公園なんかですと、そういうケースがあります。せひ川でもやってみたい。実際小さな川ですと、市民レベルでも十分計画、管理ができるんじゃないかと思うんだけれども……。

田村 盛岡の北上川でやったのは、花などを市民が植えちゃって、建設省がいかにとかないとか言っているうちに、何となく容認しちゃった。

こうした、少しずつゲリラ的に、なし崩しにしているものはあるけれども、正式なものはまだなかなか……。

森 市民参加の関連でちよつと新しい動きが出ているのは、学校の前を河川改修するなんていうときに、小学校などから、学校教育でも使えるようなものにしてほしいという要望が出始めたことです。行政側も、それを踏まえて一緒に詰めていきたいと思います……。

岡島 それはおもしろいですね。大田先生が、事故を心配して、水遊びなどは困るといふようなケースが多いで



高橋 裕 さん

すけれどもね。

森 森さん自身は、触れ合いたいという気持ちと、危険性とのジレンマみたいなものをどのようには解消していったらいいと思いますか。

森 難しいですね。でも、あまり危ないところだとも思っていないんです。確かに危ないところもあるけれども、川を知っていれば、しかも街のなかの川ならそんなに危なくはないと思うんですよ。

田村 イギリスのどこの公園だったけれども、ああいうところはよく柵

●子供、自然、水辺

森 全般的にいつて、町中の子供たちを見てみると、自然についてはすごく深刻になってくるんですね。虫を手でつかまえられるとか、チョウチョウを怖がる。チョウチョウが蛇とかゴキブリと同じになってきているんです。

東京のある学校から、どうしたらいいかと相談を受けているんですが、採取できる生きものが何もないと。学校の前に、シーズンになると売りに来るんで。そして、ザリガニならザリガニをかうだけども……。

高橋 さわれない？……。

森 さわるんですけれども、遊び方が違うんですね。飼うんじゃないで、ザリガニの足を抜いていくんです。抜いて、またはめるんで。笑

岡島 プラモデルみたいなの……。

森 そういふ遊び方をしているんです。それで校長先生とPTAの会長さ

も何もない公園があるでしょう。そこに書いてあったのが非常に印象的なんです。「アット・ユア・オール・リスク」、あなた自身の責任でやれと。

森 横浜でも、悪い例があつて、五年間ないようにと祈っているんです。そうすると、そういう思想が定着するのではと思っています。全国的にだいぶ変わってきているとは思ってですね。河川管理者の方も、あまりそんなことばかり言っていたら川が活性化しないというので、何とか柔軟に考え始めている。

んが慌てちゃって、何とかならないものだろうか。

生きものとか、自然の触れ合いがものすごく違ってきている。生きものを少しとらせるとか、あるいは少し危ない遊びをさせるとかしないといけないかもしれない、という感じです。

高橋 生まれたときからマンションの中という人が、日本人の過半数になってきたでしょう。子供のときに自然とのつき合い方を知らないというのは健全な自然観が育成されないおそれがあり、重大な問題だと思つてます。

最近の水辺に関する意見というのは、要するに昔の人間と川の関係にもどせということかと思つただけども、それは見た目だけではなくて、川へ子供たちが入って、魚をとったり、昆虫をつかまえたり、堤防の上で寝転んで遊んだり、そういうことが大事じゃな

いですか。

水辺の復活もそういう面で考えることが大事で、どうもいささか見てくれに偏っているんじゃないかという気がするんです。

岡島 困つたことに、日本中がそうなんですよ。

田村 そう。そういう意味では、田舎だって今は完全に都市化している。

信州のある町に行つたら、川では絶対に泳がせないんです。川の近くにプールがあつて、プールで泳いでいる。逆に、夏休みで都会から来た子供たちがジャブジャブ川で水遊びなんかをしている。実に逆の現象が起きているんですよ。

高橋 生活が都市化しているんですね。

森 ですから僕は、川といつても、子供と川にすごく重点を置いているんです。

子供と話していて、汚い川をきれいにしてほしいというときに、僕たちの世代はもう当たり前なんです。今の子供たち、大学生ぐらいでも半分ぐらいはそうなんです。「何で川をきれいにしなきゃいけないの」という答えが返ってくるんですね。学校の先生に聞かれればそれなりの答えを言うのでしようが、普通に僕たちと話していると、何できれいにしなきゃいけないの、何で掃除しなきゃいけないの……。

田村 そのとき、何と言つてですか。
森 もう、返事に困つちゃうんですよ。(笑)

家でも学校でも、川に遊びに行っちゃいけないと言うでしょう。川へ行っても、柵で入れないようになつていりし。川が楽しいところだとか、遊び場所だという感覚がないんですね。逆に、怖いところ、何となく汚いところだ。だから、そんなところを何できれいにしなきゃいけないのというのが出てくるんです。

岡島 そういう現状を踏まえて、森さんなりの将来像はどうでしょうか。

森 すばらしい水辺をつくらうというときに、今一番重要なのは、子供が興味を持つような、子供が行ってみておもしろいような水辺、あるいは魚がとれるところ、トンボを追っかけまわせるとか、何かそういう子供を引きつけるみたいなのをやっていくことだと思ふんです。それをエコアップとも言っているんですけども、そんな水辺づくりが当面要るんじゃないかと思ふいます。

デザインをはじめとして、街づくりの面からもやらなきゃいけないことは相当あるんだけど、水辺、とくに川をきれいにするというの長い話だから、次に水辺再生に取り組むエネルギーをどうやって子供たちにつなげていくかというのが当面の課題じゃないでしょうか。

岡島 そうすると、子供たちには小さいときから……。

森 ええ。汚い川でも遊ばせてやりたいと思つています。

照葉樹林の

なかで

幸村 真佐男

それは全国廃村マップを作成することから始まった。一九六〇年代の高度成長経済の結果として農山村から、人々が、家族が、離村を始め、主に炭焼きを収入としていた山村がまったくの廃村として登場してきた。

青山のアパート住まいが間組本社ビルの建設工事のおおりで追い出され、検討した結果、立川の米軍ハウスに入った。それは、専有空間・費用比が周囲の日本人のための貸家や都心のマンションに比べて抜群に有利だったからにはかならない。

私が米軍ハウスに入ろうとしたその時期は、ベトナムから米軍が撤退した直後で、占領当時の輝きも失せたゴーストタウンのような空気がかりであった。しかし、ハウス・コミュニティなどと称して、主に芸術家を中心に呼びかけていると二、三年のうちにすぐに満杯となつてしまった。

そこに住んで一〇年目に、一つの選択を余儀なくされた。長男が高校生になろうとしていたのである。そのまま

住みつづければ次々と子供たちが高校に入るの、もうさらに一〇年はそこに住みつづけなければならなかった。ベクトルは二つあった。都心にもどってビジネスを一生懸命にやるか、過疎の村に入り込むか。

全国廃村マップを手がけた滋賀の高時川上流、十日町の山のなかや信州などいくつか候補地があがった。しかし、それらはすべて日本でも有数の豪雪地帯である。女房の「寒い所はいや」のひとつで、南房総の山のなかにしようと決まる。

鴨川の駅で電車を降り、自転車屋さんから古い自転車を借りて、嶺岡の林道を西に一直線に一五キロ。自転車をひきずって、すいこまれるようについたのが、西野尻の集落である。江戸時代には二五石で九〇戸、現在は六三世帯の、乳牛と米を中心とする純農山村である。そこは数年前ポナベ島に行くときに八〇〇メートル上空から見ると感動した、みごとにえぐれた鴨川地溝帯のすぐ南であった。そのこともまた鴨川に住むことを決意させた要素の一つである。

今、私たちは照葉樹林の真只中に住む。カシ、シイ、ヤブニツケイ、シロダモ、マテバシイ、タブノキ、マキ、カラスザンショウ、ヤマモモ、フジ、アケビ、カヤ、カツラ、ヤマザクラ、マダケ、アオキ、アリドウシ等の混合林のなかで、フイトンチッドをたくさん浴びながら暮らしている。

冬には南斜面に建っている二階部屋から、憧れの「カノープス（龍骨座の

アルファ星）が地平線ぎりぎりにかりと見える。

むろん村落共同体は非常に強い結びつきがある。道普請、念仏講、葬式、神送り、神迎え、共有林の間伐等々、全部のつき合いにもかくつき合うことを前提に、かつての「ハツチム」の地名（じみょう）であった隣家の半兵衛さん（いまでも屋号で互いに呼び合う）の肝入りで「もより」とのつき合いを開始した。

現在は、たまたま京都で職についているので週のうち二、三日鴨川にいてることがやっとな、農業者としては、まったくの失格の烙印を押されている。

「採集経済段階」であると笑われながら、淡竹や真竹のタケノコ、一面に生えているセリ、大きな葉をかけるコンフリー、ワラビ、ゼンマイをそれにタラノキ等の山菜。シイやハンノキに、植えたシイタケやナメコ。ポリジヤセーのハーブ類、ミカン、カキ、梨、栗等の果樹を育てたり、とったりしている。

今、鴨川周辺、さらには南総全域にわたって多くの脱都会派住人が増えている。むろんこの過疎問題が解決されたわけではない。

があと一〇年もするとそれぞれ独自のワザと生活のスタイルをあみだしながら、独自の新しい文化的風土を生み出すのではないかと予感がしている。

都市が再開発で新しい様相を見せるとき、農村や山村では息の長いリコンファームが密やかに進行している。